

ニッポンの宿題

「何もしない」がリスク最大



1936年生まれ。東京大学名誉教授、元日本学術会議会長。著書に「規制の虜—グループシンクが日本を滅ぼす」。

2025年まで視野にした長期戦略「イノベーション25」を第1次安倍内閣の07年、歴長としてとりまとめた。人口減少と高齢化の進行、知識社会・情報化社会・グローバル化の進展など激変する世界の中で、日本経済が成長していくには、イノベーションしかない、と指摘。科学技術、社会制度、人材育成の3本柱で処方箋を処方した。第2次安倍内閣も、「科学技術イノベーション総合戦略」が掲げられている。

政策研究大学院大学名誉教授 黒川 清さん

イノベーションとは、技術革新に限らず、急速に大きく変化する世界で、多くの課題に対して新しい社会的価値を生み出すことです。15世紀のグーテンベルクの活版印刷は、教会が支配した聖書を社会に解放し、情報を広げる技術の急進な進歩で、現在はいんターネット、人工知能(AI)が大衆を起しています。その中でイノベーションを生み出せるのは異能、異端の人々です。「イノベーション25」で処方箋のキーワードに掲げたのも、「出る杭」を伸ばす人材育成でした。

「異端」です。整形外科医のコー...

スを外れる。失敗を経て、基礎研究の道に入り、苦労して遊業。新しいフロンティアを切り開き、大きな花を咲かせた。そのような「出る杭」を伸ばす環境が必要で、「出る杭」を育てる状況に向きつていなければなりません。日本は、「出る杭」を育てる状況に向きつていなくても、まだ大丈夫です。そのことを強く感じたのが、2011年の福島第一原発事故を検証した国会事故調査委員会、委員長として取り組んだ時です。検証作業の中で見えてきたのは、事故生み出した、タテマツ、同調圧力、個人より組織といった日本の特有の社会構造です。報告書ではこれを「人災」と表現しました。背後にあるのは、新卒就職する定年まで動かす、組織の論議を優先させる「単線線路のマインドセット」。江戸時代の鎖国政策の名残でしょう。企業も困ったなら市民にも社会でもなく「ムラバシ」と異論です。個人が独立して考え、異論を言い、活路に議論し、行動できる環境でないと、イノベ...

世界は生まれにくいのです。世界の国々は、時代の激しい変化に対応するため、イノベーションに焦点を定めた戦略を取り組んでいる。「何もしない、先送り」が、最大のリスクです。イノベーションは、従来の枠組みを壊す「破壊的」なものと、改善の先にある「漸進的」なものがある。日本は「破壊的」には弱いが、「漸進的」に強みがある。そのような「弱」と「強」を意図することは難しい。私は若い人に期待します。「出る杭」になれ、海外に出て、違う価値観を体感し、独立した個人としての自分を自覚し、世界を感じること。そして失敗を恐れぬこと。行動し、失敗しても、その経験から学び、賢くなる。そんな若者が増える社会に、日本が変わってほしいと思います。(聞き手:平和恵)

イノベーションへの道

技術力も経済力もあるのに、日本ではアップル創業者のステーブ・ジョブズ氏のような経営者がいません。かつて、ソニーやホンダはゼロから世界的企業に成長しました。イノベーション(技術革新)を起こす人や企業を生みだすのに、何が足りないのでしょうか。

いまの日本ではソニーやホンダが現れないのか。米国では大学からベンチャー企業が次々に現れて、イノベーションを起しているのに。イノベーションというと、だれもが口にするのがこの23年です。2005年にパオロン・オースティンを立ち上げ、ミドリシの屋外大量培養技術を確立し、彼らもよく賞賛されます。でも、時代背景や国の成り立ちが異なる日本とは異なる、単純比較はできません。

ユーグレナ社長 出雲 充さん



1980年生まれ。東京三菱銀行を経てユーグレナ創業。著書に「僕はミドリシで世界を救うことに決めた。」。

スポーツ同様 挑戦を支えて

まずイノベーションは、いままでの延長線上にない、全く新しいものを作り出すこと。馬車が自動車に切り替わったようにです。既存の社会にうまくはまらず、新しい...

いれルや仕組みが必要になる。社会の成熟が進めば、受け入れにエネルギーも手回りがあります。ソニーやホンダが生まれたのは戦後のなにもない時代。同じ環境で、新たな事業を起すことと、新しい産業を立ち上げることに、なんの懸念も違和感も感じないはずなんです。社会が成熟したままではダメです。社会が成熟したままではダメです。...

じゃあ、どうしたらいいか。スポーツの世界を手本にしてはどうでしょう。野茂英雄選手やイチロー選手が大リーグに挑戦し、成果をあげ、多くの選手が続き、大リーグ行きは当たり前になった。挑戦を、社会全体で評価し、応援する雰囲気も醸成されました。サッカーも、テニスもそうです。ベンチャーは、社会が成熟化するなか、危ない、キャンベルのイメージをまっとうして、本人が挑戦し、そして、家族、企業や役所に人材が滞留していません。でも、日本は、実力がある人が挑戦して失敗しても生活できなくなるような環境ではありません。ベンチャーの世界でも野茂選手のように世界に通用する野茂選手はまれれば、この認識を根底から変えていけると思います。

うとはならず、金余りの時代なのに大学にはお金が回ってこない。

全く異なる経験として欲しい。私は大学1年のときバンダラシネを訪れたのがきっかけです。この国であなた子供たちの栄華失調をなくしたい。そう考え、行きついたのが新しい栄養素、エネルギー源として注目されるミドリシでした。屋外大量培養に成功するまで2年以上かかりました。が、くじけなかったのはこの目標があったからです。いまの若者は、食欲に欠ける草食系といわれます。いいじゃないですか、私と同世代以下の起業家や研究者は、人々に喜んでもらうことや、研究自体の面白さが多すぎて、あまりガツガツしていない。そんなに頑張れないのです。志のある若者が確かな技術がある。あとは挑戦を許す、その芽を育て、応援していく土壌です。それが備われば、日本は世界から人材が集まる、あこがれの地になれます。(聞き手:甲田也)



技術革新力 ランキング

年によって評価する指標が異なっている

INSEAD、世界的な所有権機関などによる年次調査(グローバルイノベーションインデックス)から

- 16年 1 スイス 2 スウェーデン 3 英国 4 米国 5 フィンランド 6 シンガポール 7 アイルランド 8 デンマーク 9 オランダ 10 ドイツ 11 韓国 12 ルクセンブルク 13 アイスランド 14 香港 15 カナダ 16 日本 17 フランス 18 19 20 21 22 23 24 25 中国

Innovation



砂漠に人工的に雨を降らせる



カプセルを飲んで寝ている間に健康診断



丸められるディスプレイ



世界中でキャッシュレス